

コロナ禍による欧米同業者の現状 世界共通の困難に立ち向かうために

今回は、前号にて告知していた「World Wrap Masters JAPAN」の内容に変わり、急きょ蔓延した新型コロナウイルスの影響と、同業者の現状について紹介したいと思います。なお、この記事は4月22日執筆です。現状は刻々と変わっていくので、時系列と経過時間によって齟齬が生じる可能性もあります。その点は、ご了承くださいませと思います。



ウイルス蔓延で広がるイベント延期の嵐

私は今年だけでも、4月までで3つの海外出張を予定していました。1月末にインドネシアのジャカルタ、3月中旬にスペインのマドリード、4月初旬にアメリカのフロリダです。しかし、全ての予定は事前にキャンセルになりました。

ここからは時系列順に沿って、まずは私自身の経験から話を進めていきます。1月中旬、中国・武漢で謎の感染症が発生していると、初めてニュースで取り上げられました。その頃はまだ、日本を含めた世界はさほど危機感を抱いておらず、病原体に対しても関心を持っていませんでした。

私はラッピングの講師としてインドネシアに招かれており、1週間ほど滞在する予定でした。しかし、現地の方々や参加の決まっていた中国人と日程が合わず、結果的に残念ながら見送りになってしまいました。

このキャンセルは偶然の産物でしたが、危うくウイルスの真ん中に飛び込むところだったかもしれないと、後になって胸を撫でおろしました。もしこの出張が実現していたら、中国人との濃厚接触で私も感染していたかもしれません。

次に3月に予定していたスペインです。14～21日に開催予定だった展示会「FESPA2020」に行く予定でした。当社の運営するPPFSHOPの出展やラッピングのデモンストレーション、世界大

会に参加する日本人選手のアテンドなどさまざまな要件があったのです。しかし2月頃になると、国内でも感染者が出始め、ジワジワと新型コロナウイルスの報道も大きくなり始めていました。

それでも、まだ欧米での感染者はいなかったため、ヨーロッパ諸国の反応は他人事。ウイルス騒動はアジア近辺だけという風潮でした。そんななか、世界各国で進む、中国や日本からの入国制限。FESPAが無事開催されても、日本人であるために隔離されてしまうのかもしれない。一抹の不安がよぎりました。

3月5日、イタリアの感染者数が急激に伸びたのを懸念し、FESPA運営は展示会の延期を発表。結局私の不安は杞憂に終わったものの、正式に中止が決まるまでの間は出展準備を続けなければならなかったのも、気もそぞろだったのを覚えています。

続いて、4月のアメリカです。フロリダで開催される予定だった展示会「SIGN EXPO 2020」通称ISAにて、現地でメーカーとの打ち合わせを行うスケジュールでした。アメリカはウイルスの広がる時期が遅かったのもあって、3月初旬くらいまでは、主催者も「絶対に開催する」と意気込んでいました。しかし念願かなわず、感染者は増えてしまい、3月12日に延期が発表されました。

実際に蔓延するまでの期間でうそぶ

いていた、アメリカの同業者たちの言葉が印象に残っています。「新型コロナウイルスはアジア人だけが感染する病気だ」「世界で報道されているニュースは大統領選挙を邪魔するフェイクニュースだろう」「たてかかってただの風邪だろう?」などなど。当時の彼らは、割とのんきに話していました。

危機感を持つのが遅すぎた人たちの末路

そんな彼らは、現状どのような生活を送っているのでしょうか。ここからは、アメリカ、ヨーロッパの順番で、現状に触れていこうと思います。

日本で少しずつ流行りだした頃、海外で本格的に流行する前から、私は危機感を抱いていました。これまで各国のイベント会場を渡り歩いてきましたが、多くの国ではトイレで手を洗う人は少なく、ジャンクフードは手づかみで食べ、レストランでおしぼりなしは当たり前、という認識だったからです。これは大変なことになると感じて、世界中の同業者たちに「手洗いとマスクは必須だ」と、その重要性を伝えました。しかし、欧米の仲間からは失笑され、なかには「マスクをつけるなら感染した方がいいぜ!」と言い放つ者もいたのです。世界中で未曾有の大災害にまで発展してしまった今、残念な気持ちで心がいっぱいです。

その後アメリカでは、感染のひどい

SAMURAI WRAPPER



米・タイムズスクエアや伊・ヴェネツィアなど各国の観光地も、かつての活気を失っている

地域や州をロックダウンし、隔離しました。ですがそれでも、同業者の事業主やフリーランスの仲間に危機感はなく、「そんな関係ないからどんどん仕事を続けるぜ!」と意気込んでいました。

けれど事態の悪化とともに、状況は変わっていきます。クライアントの自宅待機によって発注案件が白紙になったり、現場の閉鎖によって施工中止を余儀なくされるケースも頻発するようになったのです。大小問わず次から次へとイベントが中止になり、その時初めて、彼らは最悪の事態を迎えてしまったと思いついたのです。

それでも手の早い同業者は、いち早く提示された政府からの援助や融資申請に動いたと聞いています。しかしそれも時間が経過するにつれて、一筋縄でいなくなっていく。ほぼ全ての申請手続きはWebを通して行われるため、人の増加とともに回線のつながりが悪くなってしまい、簡単に援助を受けられなくなりました。

融資や補助金が口座に振り込まれるまで、2週間以上の遅延は当たり前。その影響か、10人近くの社員を一時解雇したという話や、仕事なくなり、急きょ家庭菜園を作って自給自足に努めるフリーランスの話も聞きました。なかには工場を締め切って限られた人数で少

しの仕事をこなしたり、政府に許可をもらって防護服で作業した会社も。それでも、一時解雇の人数は日々増え続けているようです。そんな危機的状況が、現状のアメリカです。

ではヨーロッパでの同業者はどうでしょうか。私の知るところでは、都市部ではロックダウンや外出禁止令によって、受注が完全ストップしていたと聞いています。ただ、ラッピングやサイン製作会社は比較的郊外にあるので、地方に工場を持っている会社は先のアメリカと同じく、もともと受注していた少ない案件を粛々と行っているようです。

私たち日本人は、幸い早い段階から新型コロナウイルス対策に動いてきた成果もあり、欧米ほど絶望的な状況にはなっていません。それでも、現在ロックダウン手前の外出・営業自粛の最中です。ともすれば、ほかの国と同じような状況になりつつあります。世界はこれほどまでにつながっているのです。欧米の動向は決して他人ごとではありません。

「何とかなるだろう」と楽観視して、もしこの先の仕事が全て白紙になってしまったら、待っているのは倒産だけです。そのためにも、対岸の火事と思わず、冷静に景況を見られる視点を持つのが、この危機を脱し、企業として生き残る鍵になると思っています。

荻谷 伊
(かりや ただし)



1969年2月3日生まれ。89年大学中退後、父の看板業を手伝い始める。07年より、カーラッピング専門のPPF事業部を立ち上げ、車体装飾に注力。日本カーラッピング協会の会長も務める。現在は、数々の世界的ラッピングコンテストで受賞を果たす傍ら、世界各地で車体装飾のデモンストレーションを実施するなどトレーナーとして活躍。各国におけるサイン製作の現場も積極的に視察し、業界の発展に寄与する活動を続ける。

主なラッピングコンテスト

2017年 (アメリカ・ラスベガス)	
SEMA Show HEXIS Wrapping Battle	2位
2018年 (ドイツ・ベルリン)	
FESPA World Wrap Masters	4位
2018年 (アメリカ・ロングビーチ)	
Wrap Olympics	優勝
2018年 (アメリカ・ラスベガス)	
SEMA Show HEXIS Wrapping Battle	3位
2019年 (ドイツ・ミュンヘン)	
World Wrap Masters Europe	8位
2019年 (アメリカ・ロングビーチ)	
Wrap Olympics	準優勝

SNS

フェイスブック (荻谷 伊)
Instagram @designlab.inc.wrap_japan
Twitter @tadashikariya

株式会社デザインラボ PPF事業部

〒501-6023
岐阜県各務原市川島小網町 2150-24
TEL/FAX : 0586-89-2332
〒243-0021
神奈川県厚木市岡田 3122 apr サービスセンター内
TEL : 046-258-6531 FAX : 046-228-7636